



僕はひたすら走った。真っ暗で前が見えない。それでも走るしかなかった。

始まりは彼女が落とした定期入れを拾ったこと。

「あの、落としましたよ。」

「あ、すみません…。」

驚いた。とても小さな顔、大きくて吸い込まれそうな瞳、ずっと通った鼻、小さく花びらのような唇…どこをとっても完璧だった。僕は茫然と立ち尽くしてしまった。

「あの…定期…」

「あ、すみません。」

その日一日中、彼女のことが忘れられなかった。彼女の顔が目には浮かんで消え、ふとした瞬間にも思い出した。

夜の9時。家に帰宅してから冷蔵庫をあけ、ビールを一口口に含んでのどに流し込む。うまい。今日の疲れなど、忘れてしまう。単純な人間なのだ。そして、コンビニで買ってきたのり弁当を食べた。これしかなかったのだ。前日もそうだったように思う。まったくついてないな、と言葉がこぼれた。

ピンポン。

ふいにインターフォンがなった。こんな時間にいったい誰だ？インターフォンの受話器を取ろうとして驚いた。さっき、駅で出会った彼女が立っていた。

ピンポン。

鼓動が激しくなる心臓。僕は鼓動に支配されながら、インターフォンをとった。

「はい。」

「あの、隣に越してきたものです。夜分にすみません。」

「あ、今あけますんで」

それから、彼女と僕は親しくなっていた。朝の挨拶から始まり、お互い独り身で、僕は料理が苦手だが、彼女は料理が好きでよく作っているが、食べてくれる相手がないという話…

「そんな美しいのに？」

うっかり口走ってしまった。

「いえ、そんな…」

彼女は真っ赤になってもごもごといった。かわいい。本当にかわいい。僕はもう彼女に夢中になっていた。

「あの…よかったら、料理、食べさせてもらえませんか？」

しまった。僕は自分をわきまえず、口走ってしまった。そして後悔の念に悶えた。

しかし、彼女から返ってきた言葉はあまりにも想定外で最初は信じるができなかった。

「いいんですか？今夜、私の家に来ていただけませんか？」

目を少女のようにキラキラとさせて、少々興奮気味に彼女は言ったのだ。

「え…！？」

僕の戸惑いを彼女は勘違いしたのだろう。

「あ、ごめんなさい。いきなり来てくれ、なんて失礼ですよね。」

「あ、いや。あの、本当にいいんですか？僕で？」

「来ていただけますか？うれしい！今夜は何時頃ご帰宅ですか？」

「たぶん、7時には…」

「では、7時半にインターフォン、鳴らしてください。」

「あ、はい。」

その日一日は仕事にならなかった。彼女の作る料理、彼女との夕食…生唾を飲む回数が増えていることに気が付いて、自分を恨めしく思うと同時に、少し、誇らしく思った。自分も捨てたものじゃないかな？そんなうぬぼれまで湧き上がった。

夜、足早に帰宅し、私服に着替え、そわそわと7時半を待った。そして、7時20分、とうとう抑えきれなくなって、隣家のインターフォンを押していた。

「あ、はい。今あけます」

「あ、あの…あ、はい。」

部屋は思っていたより、簡素なものだった。彼女のことだから、かわいいものに囲まれているのかと思ったが、そうでもない。割と、というか、かなりものが少ない。

「私、部屋を飾ることがうまくないんです」

僕の心を読んだかのように、彼女は遠慮がちに言った。

「え、あ、いや。僕はこういう部屋の方が好みます。」

一体何を言っているんだ。自分の言葉に再び後悔した。

「嬉しいです。」

彼女は真っ赤になりながら微笑んだ。

夕食は、本当に素人かと思うほどおいしかった。何度、「うまい！」と叫んでしまったかわからない。彼女はそんな僕を見つめていた。

「素敵な目をしてるのね。」

彼女は僕の目を見つめてそういった。驚きと、嬉しさと、照れ臭さで、目をそらした顔にそっと彼女の冷たく細い指が触れた。

「もっと見つめていたいわ。」

僕は彼女の瞳に吸い込まれそうになっている自分に気が付いた。魔性—そう。彼女は魔性なほど、美しい。

「いや、そんな。」

次の瞬間、驚愕した。彼女の顔がさっきとはまるで違う。見開かれた赤い目、裂けた口。滴るよだれ。

「うわあああああああつっ」

僕は後ずさり、部屋から出ようとした。

「ぶははははは」

彼女のものとは思えない、いや、違う。太い、男の笑い声が聞こえる。

「おい、その目、くれよ。」

強い力で首を抑えられた。そして、顔をグイッとひねられたかと思うと、恐ろしい爪が目元に食い込む。僕の視界は真っ暗になり、痛み悶絶した。

「美しい。きれいだ。この目がほしかったの。ぎやはははは」

いったい何人いるのかわからない。その化け物の声は男になったり、子供になったり、彼女になったり、すべてが混ざったりした。

僕は何かにつつかりながらひたすら走った。そして、ドアノブが運よく見つかりドアをはね開け、わけもわからず走り続けた。そして、だんだん意識が薄れていった。何？何？何が起こったの？

目の部分全体が無くなった遺体は、恐怖の表情のまま固まって、道路に転がっていた。あまりのおぞましさに、直視するのが難しい。

「さてと。今日はどんな顔をしていくか。」

たくさん目、鼻、口、すべてをとられた顔がずらりと並べられた部屋で、そいつはにやにやした。

「今日はこれとこれとこれとこれにするか。」

今日はハンサムな男の顔が出来上がった。隣人だった男の目元はそこに誇らしげについていた。